

# 隠岐島の弥生時代低湿地遺跡月無遺跡について

勝部 昭<sup>1)</sup>

## Tsukinashi site; A low wetland site of the Yayoi period in the Oki islands

Sho Katsube<sup>1)</sup>

**Abstract:** Tsukinashi Site, a low wetland site of the Yayoi period (300~200 B.C.-A.D. 200~300), is located on the riverbed of Yabi River in the Oki Islands.

This site was discovered in 1966, and many unglazed Yayoi earthenware, stone implements, and wooden tools for cultivation were excavated. This site dates back to the end of the early phase or the beginning of the middle phase of the Yayoi period, and extends to the latter phase of the Yayoi period.

Tsukinashi Site is positioned at a place below 0 meters above sea level, therefore indicating that the water sea level during the Yayoi period was lower than it is today. This is an important point beyond considering the Yayoi period of the Oki Islands. In the future, if there are more investigations on the wetland site of the Oki Islands, then it could be possible to restore the ancient environment.

**Key word:** Oki Islands, the Yayoi period, Tsukinashi Site, a low wetland site, the sea level.

### 1. はじめに

島根半島の沖合い40~80kmの日本海に位置する隠岐諸島には古代の遺跡が数多く知られている。本稿では低湿地に位置する弥生時代の遺跡の1例を紹介し、当時の隠岐の自然環境を探る一助としたい。

今のところ隠岐の弥生時代遺跡は西郷町の中村湊遺跡、月無遺跡、大城遺跡、都万村の都万小学校校庭遺跡、海士町の竹田遺跡、宇受賀遺跡等があげられる。この中にあって月無遺跡はごく簡単な調査が行われたに過ぎないが、豊富な弥生時代の遺物が出土した低湿地遺跡でかつ隠岐の弥生時代を知る代表的遺跡である。筆者は発見当時、遺跡現場を訪れたので当時のメモをもとに報告する。

### 2. 遺跡の位置

所在地: 隠岐郡西郷町大字有木字月無 12番地の2, 13番地, 16番地および矢尾川川底

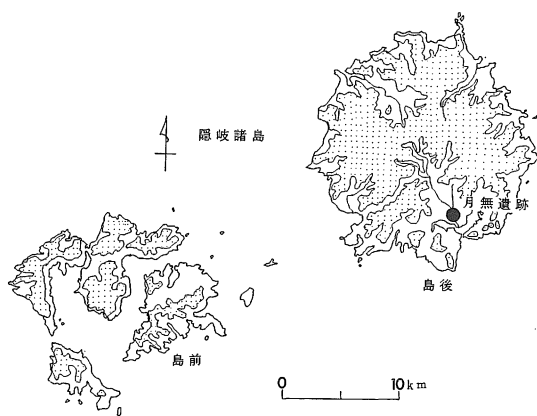


図1 隠岐諸島と月無遺跡  
Fig. 1. Oki islands and Tsukinashi site

月無遺跡は、隠岐諸島のうち一番大きな島である島後に所在する(図1)。この島最大の河川は八尾川である。この川は近石川、真杉川、銚子川などの流れを集め、さらに古川、有木川と合流し西郷湾に注いでいる。下流域に形成された西郷平野は隠岐最大の平野である。八尾川の川口から2.1km遡ったところに八田橋が架かる。この橋から上流側へ50m~100mの範囲の川底を中心とする遺跡が月無遺跡である(図2)。現在の川底面の標高はほぼ0mである。東を大光寺丘陵、西を八田丘陵に挟まれて

<sup>1)</sup> 島根県教育委員会文化財課  
Board of Education, Shimane prefectural office

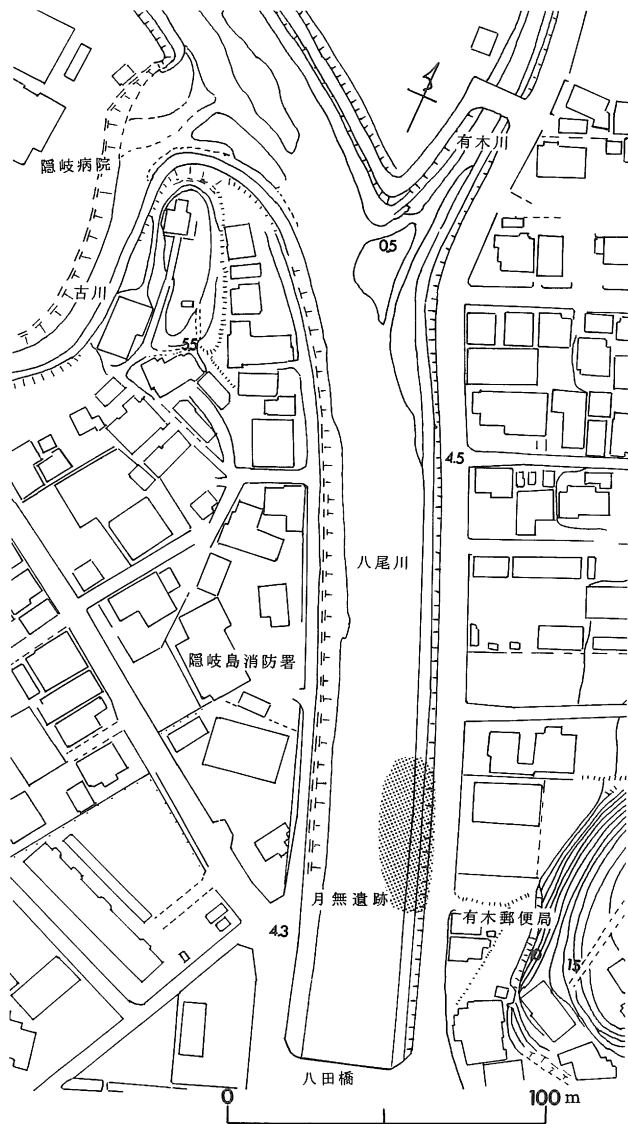


図2. 月無遺跡付近地形図  
Fig. 2. Tukinashi site

いる。

周辺の遺跡には縄文時代の宮尾遺跡、くだりま遺跡、下西海岸遺跡などが西郷湾沿いにある。また、月無遺跡東方丘陵上の西郷町総合グラウンドの西端に弥生時代後期の大城遺跡がある。付近の丘陵上には前方後円墳と円墳からなる名田古墳群・能木原古墳群・玉若酢命神社古墳群、隠岐最大の前方後円墳である平神社古墳(全長48m)など数多くの古墳がある。奈良時代には隠岐国府や周吉郡家、国分寺・尼寺等がおかれた地域で、隠岐ではもっとも遺跡の集中する地域である。

### 3. 遺跡の発見と調査

発見の端緒は、1966年8月20日、西郷町の郷土史家藤田一枝氏が、八尾川改修工事の行われている現場で弥生土器片、石器、木器等を採集されたことに

よる(藤田, 1967)。この報告にもとづいて、隠岐高校の田中豊治氏(当時校長・県埋蔵文化財調査員)ら隠岐高校郷土班が遺跡確認の調査に当たられた。8月27日、29日は、水止め堤防上に掘りあげられた土の中から遺物を採集し、30日、31日は調査地点(田中, 1975)において、川の水面以下まで土を崩して、弥生土器や杭列を検出し簡単な実測をされた。さらに、9月3日、4日にも、掘りあげられた土から土器、石器を採集された。余暇を利用した調査のため実質的には合わせて1日くらいの調査であったという。筆者は、9月11日隠岐高校を訪れ弥生土器片、石器類、木器類などの遺物を実見するとともに、現場において杭列など遺跡の状況を知った。

遺物包含層は、黒色粘土層であって、八尾川東側の水田表面から5m以上、川床面から2m位の深さに存在する。黒色粘土層は5mにも及ぶ厚い層で、遺物はこの上層部分に包含されていたという。杭列は護岸あるいはしがらみ状の用に供せられたものと考えている(田中, 1975)が、貯木のための囲い施設の可能性も考えることができる。その後昭和42年1月、近接の東側水田においても木製品等の遺物が発見されているので、遺物包含層は近くの水田地下にも広がっていると推定される。この包含層は、八尾川流域条里制遺跡の調査で八尾川下流域の水田地帯のシルト層は浅海性の内湾の堆積層と考えられている(斉藤, 1978)ので、この堆積層中と推定される。

現在、この遺跡は河川の改修工事が終わり、川幅が拡張され、遺物を出土した場所は川底となっており、東側は水田が埋め立てられ宅地となっている。

### 4. 出土遺物

遺物は、隠岐高校や藤田きくえ氏、岩坂健太郎氏などが所蔵されている。出土遺物は、全部あわせるとリング箱に2箱分位であろう。以下、弥生土器、石器、木製品と自然遺物に分けて説明する。

弥生土器(図3、図4) 次のように分類できる。

Ⅰ類土器 1~2条のへら描直線文のあるものやそれのない土器などである。

甕は口径15cm内外の小形のものから、口径30cm位の大形のものまでである。胴部は口縁部よりも張らない。器の外面にはハケによる調整があり、内面にもそれがあつたものが多い。1は口唇部に刻目を施したもの、2、3、6は1条ないしは2条のへら描直線文があるもの、4、5は頸部にへら描直線文のないものである。

壺7は外反する口縁部が残り、器面をへら磨きする。鉢12は口径20cmのもので底部を欠くが、口縁端は外方に曲がる。ハケ目による器壁調整痕が所々

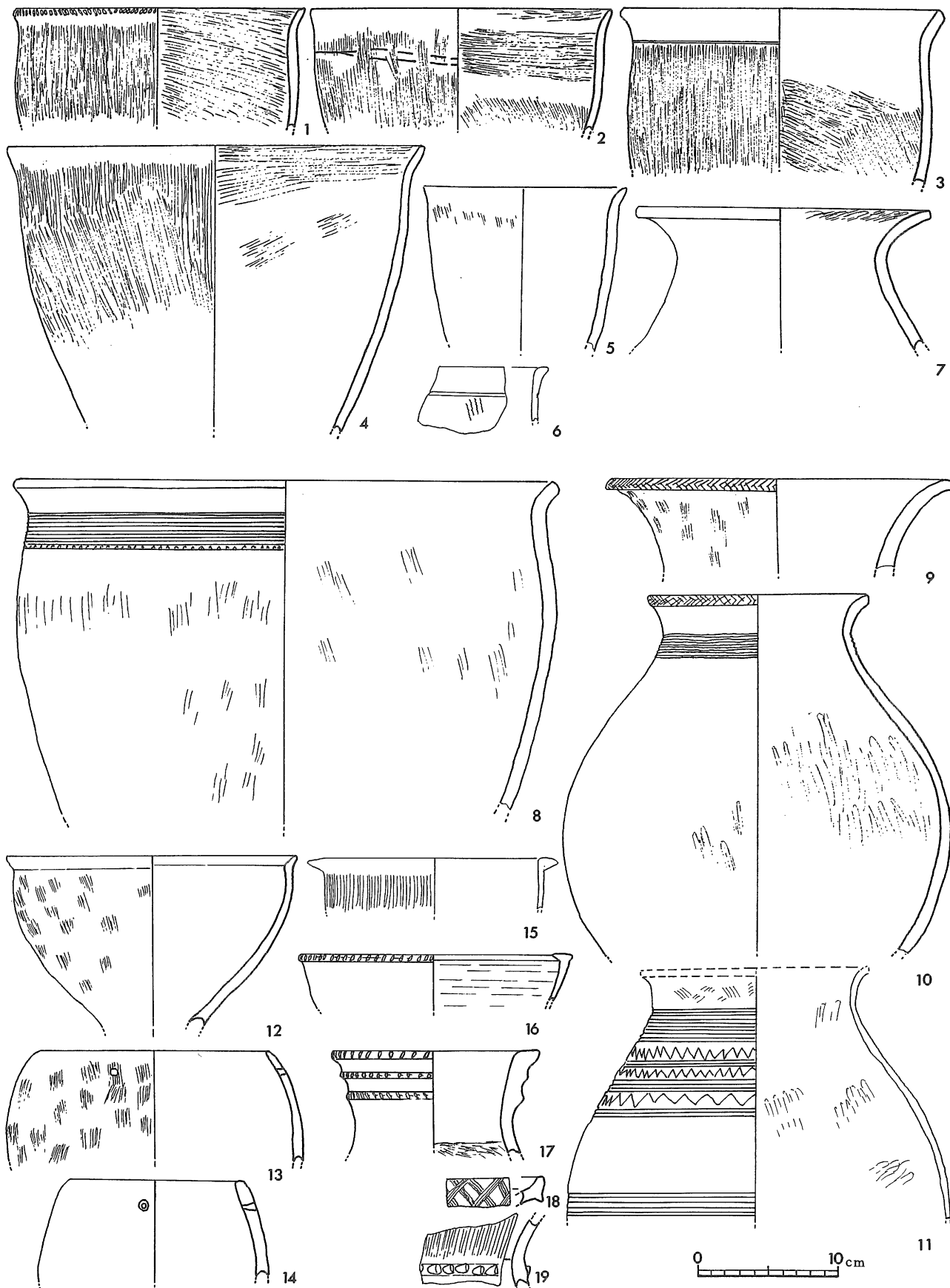


図3 月無遺跡出土弥生土器(1)  
Fig. 3. The Yayoi potteries of Tukinashi site (1)

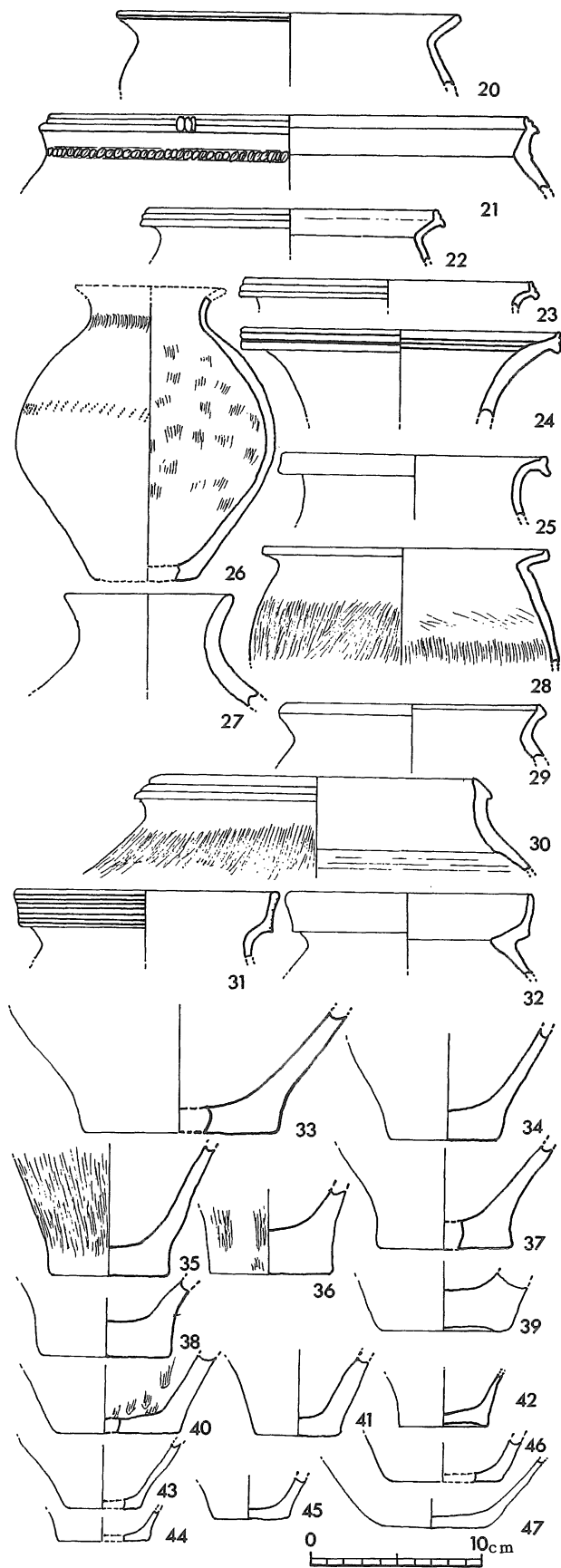


図4 月無遺跡出土弥生土器(2)

Fig. 4. The Yayoi potteries of Tukinashi site (2)

に残る。無頸壺13は口径16cmの内傾する口縁をもち、器外面にハケ目調整痕が残る。

Ⅱ類土器 ヘラ、櫛描直線文が多条化する一群の土器。甕8は口径38cmの大形のもの。口縁部が肥厚し稜線を作る。頸部に櫛描直線文を10条、その下に三角形刺突文を施す。内外ともハケ目による調整痕がみられ、器面には内外とも炭化物が付着する。

壺9は口径25cm。口縁部が外方に反るもので口縁部は肥厚し稜線をつくる。その端部にヘラによる羽状の文様を施すもの。10は口径16cm、胴の最大径27.6cm。胴の最大径が器高の半分ぐらいのところにある。頸部に10条のヘラ描直線文を施し、口唇部に羽状に近いヘラ描文様を付ける。器の内外はヘラ磨きされる。炭化物が付着し黒色を呈している。仁多郡亀嵩遺跡出土のものと類似する。東森市良氏(1983)はⅢ型式、松本岩雄氏(1992)はⅡ-1様式としている。

Ⅲ類土器 多条の櫛描直線文や櫛描斜格子文、貝殻腹縁による刺突文など装飾性に富むもの等。

壺11は口縁部端と底部を欠失するが、口径約16cm、胴部最大径27cmとみられる。頸部から肩部にかけて多条のヘラ描直線文を四列めぐらし、その間に山形文を三列めぐらす。さらに胴部に6条のヘラ描直線文をめぐらす。器面の内外にはヘラによる調整痕が残る。器厚はやや薄手で淡い褐色をする。Ⅱ類に入るものかもしれない。壺17は口径15cm、断面三角形の突帯を三条めぐらし刻みを付ける。灰黒色を呈する。壺18は口縁端部の外面に櫛状工具による斜格子文様を付ける。壺26は口縁と底部の一部を欠く小形の壺でほぼ全体が残るもの。口径は9cm、胴の最大径は15cmで、器高は17cmであろう。胴部最大径近くに貝殻腹縁による刺突文の列がある。頸部外面と器壁内面にはハケ目が残る。

甕20は口縁部がゆるく外反し口縁端が肥厚するもの。甕28は口縁部が外方に屈曲し端部が立ち上がるもの。このほか甕15は口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付けたもので松江市西川津遺跡海崎地区出土のものに類似する。高坏あるいは鉢とみられる16は断面三角形の口縁端部の外面に刻みをつけるもの。無頸壺14は小片で、紐孔をうがったもの。口径は12cmで口縁部がやや内向きとなるもの。

Ⅳ類土器 頸部に指頭圧痕文帯のあるものや口縁部に凹線文をつけるもの。

壺19は頸部に突帯をつけ指頭圧痕文帯をめぐらすものである。島根県八束郡美保関町小浜遺跡出土の壺や出雲市天神遺跡出土の壺等の手法に似る。甕21は、内傾する口縁端の凹線のうえに、円形浮文をつけている。さらに、くの字状に屈曲する頸部にも貼りつけ突帯による指頭圧痕文で飾る。甕22, 23

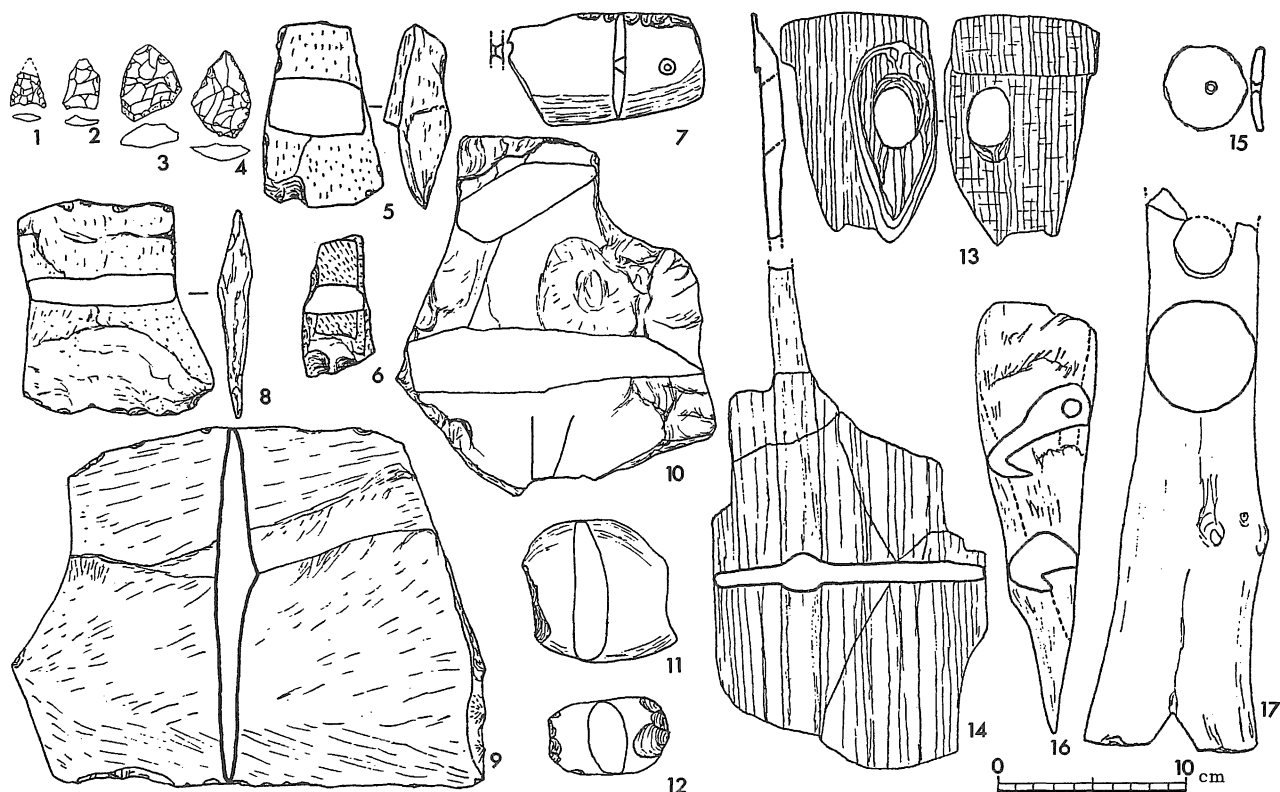


図5 月無遺跡出土石器・木器等  
Fig. 5. The stone implements and wooden tools

は内傾する口縁部端の外面に凹線文をつける。

壺24はロート状に開く口縁部の端部が上下に拡張する。その外面に凹線を付けるとともに内側にも三条の凹線をつけるもの。壺25は口縁端部が上下に拡張し、頸部の長くなるもの。

V類土器 口縁部が内傾し、内面にヘラ削りが見られるもの。壺29は口縁部が外反し端部が内傾しておさまるもの。甕30は口径19cm。口縁部は内傾し外面に凹線文をつける。胴部最大径は上部にあり、頸部外面はハケ目、内面はヘラ削りである。

VI類土器 複合口縁をもつもので甕31は口縁に擬凹線文をつける。壺32は複合口縁に文様が見えない。この他に鼓形器台も出土している。

弥生土器の底部については図4.33~47のようである。大きな砂粒を含み底の厚い平底のもの、比較的砂粒を含まない底の薄いもの、若干丸味を帯びた平底のもの、少しあげ底となるものなどがある。厚いものは古い様相をもつものであり薄いものは新しいものであろう。底径は10数cmから5cm内外である。5点の底部に×のヘラ記号がつけられている。

これらの弥生土器の時期はおよそⅠ類=前期末、Ⅱ類=中期初頭、Ⅲ類=中期中葉、Ⅳ類=中期後葉、Ⅴ類=後期前半、Ⅵ類=後期後半ごろと考えられる。石器(図5.1~12)

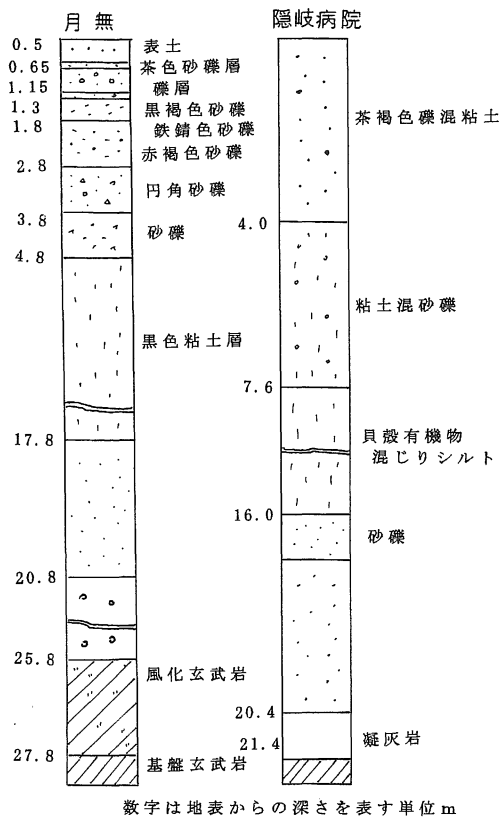
石鏃はいずれも黒曜石製で打製。1は通有のもの

の、2は五角形に近い形をしたもの、3、4は未製品と考えられる。小型石斧はいずれも打製。5は玄武岩製。6は黒曜石製で、身の部分は整形のため磨っているが、刃部は簡単な打撃を加えただけのもの。

石包丁は磨製のものや打製のものがある。7は磨製で、片麻岩製か。現存長は10.5cm、幅6cm、厚さ0.6cmである。背は打撃によって整形され、下縁は両刃で、両方から磨いている。紐通し穴は2つあり1つは片方からの穿孔、他は両面からの穿孔である。

8、9は安山岩質玄武岩製で、扁平な菱形の断面形状に近い板状に加工したものの両側に、打製の刃をつけたものである。8は小形で刃と刃の幅11cm、9は大形品で刃部は磨製、刃と刃の幅19cm。刃先の長さは大きい側が22cmである。10は打製で流紋岩製かと考えられ、形状は8、9と異なる。身の長さ19cm、最大幅17cm、厚さ3cmである。一方の側に片刃、一つの面の中央部に凹みがあり、未製品とみられる。石錘11、12は粗面岩製。海浜の手ごろな石を利用し、両端に打撃を加えたもの。

図示しなかったが長さ6.2cmの黒曜石製の石槍未製品、長さ35cm、幅25cmの割りと扁平な自然石の中ほどが2cmばかり凹まった石皿や磨石、黒曜石剥片が多数採集されている。これら石器の原石産地はすべて、隠岐島後地内と考えられる。



数字は地表からの深さを表す単位 m  
 図6 月無遺跡近傍の柱状地層図  
 Fig. 6. The stratigraphic profile near Tuginashi site.

木製品等 (図5. 13~16)

農具 13は広鋤の鋤身の一部である。現存長さ11.8cm, 幅8.3cm, 厚さ0.3cm, 舟形隆起の厚さ1.2cmである。身の厚さは収縮し変形したため薄くなったとみられ元来はもっと厚いものであろう。身と柄のなす角度は60度。柄壺の舟形隆起の裏面には上部から3.2cmのところにくの字状の切れ込みがあるのでいわゆるゲタ付きの鋤である。樹種はカン類。14は鋤で1木を切削加工して作ったもの。鋤身と柄の一部が残り、現存厚さ1cm, 幅20cmである。

杭 16, 17は穴があいており杭先であろう。他に内側をくりぬいた容器の一部、楔状のもの、小さな円孔のある板片、四角の孔をもつもの等がある。

紡錘車 15は紡錘具の心棒を欠失した紡輪で弥生中期甕の土器片を転用したもの。径4.4cmの円板状で中央に径0.3cmの小孔をあけたものである。

自然遺物 採集時、自然遺物は気に止められなかったようであるが、かなりの量のクルミが採取されている。自然のままのもの、半裁したものがある。

5. ま と め

西郷平野の形成は八尾川による沖積作用によって

出来たものと理解されていたが、1970年の隠岐島後教育委員会による八尾川条里遺跡調査の結果多くは浅海性の内湾の堆積層ということが判明した。

月無遺跡において遺物等が出土したのは黒色粘土層中で川底面から地下へ1.5m~2mほどの深さの層といわれるので、標高-1.5~2m前後と考えられる。近傍の月無、隠岐病院の地下ボーリングの調査結果(図6)においても黒色粘土層が確認されている。

遺物が出土した堆積層はほぼ当時の面を表しているとみていいと考える。このことは、月無遺跡の営まれた弥生時代の遺構面が現在の海水面よりも低かったことを示している。

月無遺跡は出土した土器から弥生時代の前期末頃から後期の遺跡である。石包丁、木製の広鋤、鋤などの出土から隠岐にも確実に稲作農耕が行われていたことを明らかにでき、近傍には集落跡が想定される。さらに隠岐島においても海水面の変動の歴史と遺跡との関係を追及することが十分可能であることを提起した遺跡で、その意義は大きいと考える。今後隠岐島においても低湿地遺跡から古環境を還元していく研究が期待される。

なお、土器の観察については不十分な面があることをお断りしておきたい。

謝辞 資料を提供いただいた田中豊治、藤田一枝、田邑二枝(以上故人)、岩坂健太郎の各氏や当時の隠岐高校郷土班の方々、またご指導、ご教示いただいた東森市良、内田律雄、竹広文明、西尾克己、広江耕史、横田登、Venecia Abeの各氏に対し深く謝意を表する次第である。

引用文献

藤田一枝(1966)西郷町の先史遺跡について。季刊文化財, 1: 46-47. (島根県文化財愛護協会)  
 東森市良(1973)月無遺跡。古代の国々出雲の国, pp. 64-65. 学生社, 東京。  
 東森市良(1983)山陰。弥生土器 I. pp. 184-192. ニュー・サイエンス社, 東京。  
 松本岩雄(1992)出雲・隠岐。弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—。pp. 431-479. 木耳社, 東京。  
 齊藤慎(1978)八尾川平野の形成。八尾川流域条里制遺跡, pp. 1-5. 隠岐島後教育委員会。  
 田中豊治(1975)弥生遺跡とその概要。西郷町誌上, pp. 103-104. 西郷町役場。  
 内田律雄ほか(1988)朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV(海崎地区2)。島根県教育委員会。